

## 話題92 本の紹介：人の逝き方を考える～終末期医療と尊厳死

源河 圭一郎著

スーパームーン。令和も2年。4月の満月は殊のほか大きく、そして澄んで見えた。地上ではコロナウイルスの嵐が猛威をふるっている。天と地、そこには対照的な風景が描かれていた。東の間の「時」を、ウイルスの嵐を避けて、やんばる、本部（もとぶ）の静寂の中で目にした満月である。

時を同じくして、恩師、源河圭一郎先生の著書「人の逝き方を考える～終末期医療と尊厳死～」（合同出版）に出会った。地球を照らす、その背景に大きな変化はみられないものの、病気、疾患の流れは、時に穏やかに、時には嵐となり、その風景を変えていく。

本の目次である。第1章：終末期医療と尊厳死、第2章：タバコと肺がん、第3章：結核、感染症、第4章：長寿県・沖縄、第5章：国立療養所沖縄病院での勤務、第6章：昭和・平成・令和の時代の医療に身をおいてとなっている。厳しい疾患と向き合った時の流れがここにある。

「人の逝き方」。猛威をふるい、多くの悲劇を演出した沖縄の「結核」の歴史と医学、医療の闘いがあった。国民の、県民の生活レベルの向上と特効薬の登場により、呼吸器外科領域の「胸郭成形術」なる用語も消えていった。ページをめくると、折り重なって「肺がん」との闘いへと展開されて行く。これらの疾患の過酷な歴史があり、必然的に「人の逝き方」、そして「生き方」についてのテーマを避けては通るわけにはいかない。患者も医者も、共に悩んだ歴史がある。

本書の第1章が「終末期医療と尊厳死」となっている。沖縄の呼吸器外科の先導的役割を担った著者の足跡から、必然的に導かれた道程でもある。目前の、厳しい疾患と必死に闘う個々人の「生き様」と「逝き方」の狭間で、悩みながらも現実を真正面に捉え、受け止めた臨床医であり、研究者でもある著者の深い想いが刻まれている。

第2章、3章で、沖縄の肺がんと結核の歴史が記録され、県民に対する啓蒙活動の足跡を辿ることが出来る。長寿県沖縄を健康長寿の島へと向かわせるための願いが込められている。

著者は、長く、日本尊厳死協会の沖縄支部長の任を務められた。「寿命」もまた、正面から受け止めることを説く。尊厳ある「死」は、尊厳ある「生」を生き抜くためにある。

戦時中、洋上で、学童疎開船「対馬丸」の炎上を目撃した著者の心の奥底に、人の命の重みと平和を希求する炎が灯されたものと思われる。消すことのできない、悲惨な戦争の影が見えてくる。

出合いを大切に、診療の現場から描かれた著者の論文は500本を超える。あえて、その時代の、その時の厳しい疾患と向き合った著者の医師としての真摯な姿勢が綴られている。

今一度、尊厳ある死、そして尊厳ある生について考えるために、今回、まとめられた本書の一読をおすすめいたします。